

普通体基調会話における日本語学習者のアップシフトに関する一考察

お茶の水女子大学大学院生
奥西 麻衣子

日本語には、丁寧体・普通体という2つのスピーチスタイル（以下、スタイル）があり、用いられるコンテキストに呼応して、話者の状況、立場性や相手との関係など多様な意味を示す（クック，2014）。同一相手との会話で常に同じスタイルが使われるわけではなく、2つのスタイルが入り混じる形で会話がなされることも多い。例えば、日本の社会的文脈において、通常同年齢の友人に対し用いられるスタイルは普通体であるが、以下の会話例のように、丁寧体が使われることもある。

＜友人同士の会話（本調査のデータから抜粋＞

A：覚えられるよ。

B：覚えられないよー。

A：覚えられますって[ーー。

B： [hhh

* 「[」は発話の重なり、「hh」は笑いを含んだ呼気音を示す。

このような基調スタイルが普通体から丁寧体へ一時的にシフトする現象は「アップシフト」と呼ばれ、話者が意見を主張するとき、冗談を言うとき、姿勢を正すスタンスを表すときなどに用いられ、会話に様々な表現効果をもたらすとされている（三牧，1989；大津，2004；クック，2014）。

しかし、日本語の教室においては、一般的に丁寧体は「フォーマル」な場面で用い、「丁寧さ」を示すときに用いられると教えられる傾向があり、丁寧度の度合い以外に多様な意味を持つことが明示的に提示されることは少ない（Cook，2016）。そのため、アップシフトのコミュニケーション上の効果は学習者に理解がなされにくいと考えられるが、実際はどうだろうか。また、先行研究では、母語話者には見られない学習者特有のアップシフトがあることも報告されている（上仲，2007）。学習者特有のアップシフトがあるとするれば、それにはどのような特徴があるのだろうか。

そこで本発表では、普通体基調の接触場面会話をデータとし、日本語学習者の丁寧体使用に着目し、どのようなアップシフトが見られるか、また学習者特有のアップシフトが見られる場合、どのような特徴があるかを探り、考察する。